ホプキンズとラファエロ前派

水　田　圭　子

ここにホプキンズとラファエロ前派（the Pre-Raphaelite Brotherhood）を並べてみたい。前者の生涯は1844年から1889年である。後者の運動は *Pre-Raphaelite Paintings from the Manchester City Art Gallery*（London : Lund Humphries, 1980）によると，1848年に結成される。やがて1853年のクリスティーナ・ロゼッティのソネットでは，このグループが離れ離れになることを表わしているとある。[1] 1860年代から1870年代以降は第二次ラファエロ前派の運動となる。

さらにこの本はウィリアム・マイケル・ロゼッティが要約したこの一派の目的を引用する。(1) 表現すべき純粋な考えを持つこと。(2) 表現の仕方を会得できるように，自然を注意深く研究すること。(3) 因襲的で自己をひけらかしたり，機械的に学ばれたものは除外して，それまでの時代の芸術において，卒直で，真面目で，深く心に感じられたものに共鳴すること。(4) 最も必要欠くべからざることは完全に良い絵と彫刻を作り出すことである。[2] このような目標に対して，この本の著者は結論として，ラファエロ前派の画家たちの業績の矛盾点をあげている。そのうちの幾つかとホプキンズを並列させてみたい。「彼らは近代生活を見ながらも，中世の伝説をふり返る。」[3] 彼らはラファエロ以前の素朴な画家たちに注目した。この点からホプキンズを見るなら，彼も現代を描くのに結果的には Anglo-Saxon の時代に注目したと言える。

またラファエロ前派は「自然の外形を一生懸命に眺めたが，実のところ彼らは情緒や想像の方へ内省的に向かった。」[3] この点からホプキンズを見ると，彼の日記も自然の外形への克明な記録にあふれている。例え

図1　ブラウン「ユングフラウのマンフレッド」

図2　ドラクロア「ドン・ジュアンの難船」

図3　ブラウン「仕事」

図4　ホプキンズ「平底船の男」

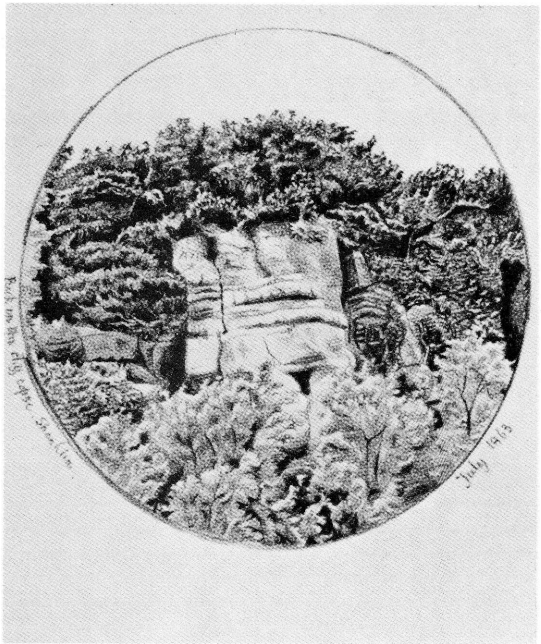

図5　ホプキンズ「崖の低林の岩」

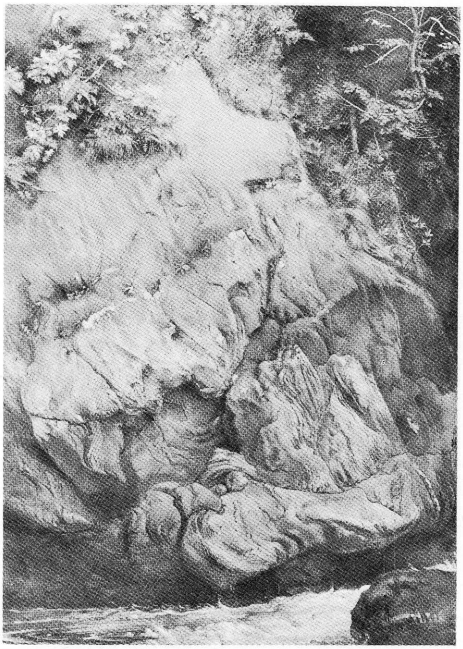

図6　ラスキン「片麻岩の素描」

図7　ミレー　*Autumn leaves*

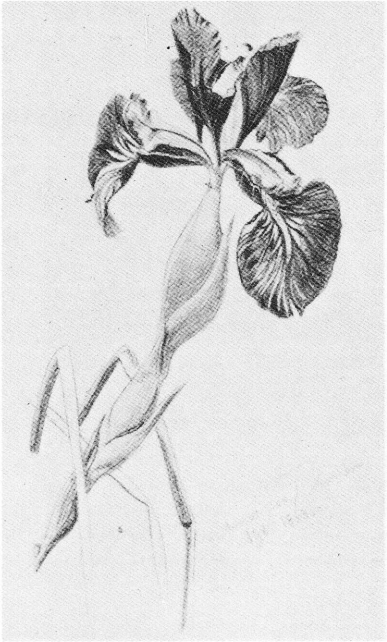

図8　ホプキンズ「アイリス」

ば，雲や夕日，その他の気象現象，海，植物，建築物の内観，外観，また時には，身のまわりの現象に科学者のような目を向ける等である。その観察にはラファエロ前派の絵と同様，intensity がある。張り詰めてその内部へ食い入るようである。'inscape' とか 'instress' と 'in' を強調することがわかる。一方先入観を捨て，物や現象を素直に真面目に一心に観察することは，瞑想の内的世界にひたることでもある。雲の観察ではラスキンやコンスタブルがいるが，ホプキンズにとっても無限の美を表わす雲や夕日，日の出等は神や天国の片りんとして自ら精神的合体を求めたものであろう。またホプキンズも言っているように，彼を魅了する，木や雲の観察をすることにより，それらはやがて詩的栄養物として彼の心に沈澱する。

先の本の著者は，ラファエロ前派が掲げた目的のうち二点は見事に達成されたとして，「表現すべき純粋な考えを持つことと完全に良い絵を描くこと」[3]をあげている。この点はホプキンズにおいても同じであったと思われる。詩を作る動機は真面目なものであり，詩の言葉の面では，巧みに言葉を組み合わせたりして努力している。ラファエロ前派，特に，ダンテ・ガブリエル・ロゼッティの独特の端正な美人とその想像の世界は，ホプキンズにおける理想の人キリストと，彼の丹念な自然観察から生まれた自然を描く言葉との関係と並列する。ラファエロ前派の画風が他の画家たちに影響していったように，ホプキンズも鷹に代表される模範的な鳥の詩等を書いて後の詩人に影響を与えている。

さて以上の並列の他に，ラファエロ前派は詩と結びついているが，ホプキンズも「人魚の幻想」(1862) の絵を同詩にそえている。また詩「ドイチュランド号の難破」は絵として思い浮かべるなら，歴史，物語ものに入るかもしれないが，迫力，ドラマ性は，ラファエロ前派と基本的には同じ目標を共有していたフォード・マドックス・ブラウンの「ユングフラウのマンフレッド」[図1] (1840—61) (バイロンの劇『マンフレッド』よ

り主題をとり，ユングフラウの絶壁で自殺をしそうになる主人公の劇的瞬間を描く)[4]，またブラウンの先生の先生にあたるドラクロアの「ドン・ジュアンの難船」[図2] (1840) (バイロンの『ドン・ジュアン』第2編による。難船者たちによる運命のくじ引きの瞬間を描く)[5]などの劇的場面と相並ぶ。

このようにホプキンズには絵画力があり，彼自身，プロの画家のようにデッサンはとても巧みであった。*The Journals and Papers of Gerard Manley Hopkins* の付録の図版2はモリスの壁紙の模様を思わせる。図版9ともあわせ，装飾的でひらべったく感じさせる。また余白をきれいに生かしある限られた空間，円とか半円，半円と四角の組み合わせた空間の内部へ描くやり方，そのまわりに文字を入れるのは，アーサー・ヒューズの「オフィリア」(1852) (シェイクスピアの『ハムレット』による)[6]，フォード・マドックス・ブラウンの「仕事」[図3] (1852−65) (勤勉と怠惰のモラリスティックな対比と，謙虚な人々への共感を描く)[7]などと形式が似ている。図版21の 'Man in a punt' (「平底船の男」[図4]) は，ブラウンの「仕事」の中の土手に休んでいる人の姿勢を思わせる。また「仕事」では中央の土方の人が，力強く，画家にたたえられるように描かれているが，ホプキンズが詩「フェリックス・ランダル」でフェリックスの力強い姿を惜しんだことを思い出させる。

図版11 'Rock in the cliff copse. Shanklin. July. 1863' (「崖の低林の岩」[図5]) はラスキンの 'Drawing of gneiss rock' (1853) (「片麻岩の素描」[図6])[8] を思い出させる。この付録の説明では二枚を除いて主として掲載されているのはホプキンズの若いころ19才から22才までのスケッチである。またホプキンズはラファエロ前派に対してはきちんとした批評精神をもって賞讃したとある。それは1874年の5月アカデミーで見たミレー (Sir John Everett Millais) の絵についてもよくない点ははっきり言っている。若いころミレーが好きで，図版1，2にみられるようにミ

レーの組み合わせ文字をまねて自分の頭文字を組み合わせたとある。「三子のたましい，百まで」とあるように，15才のときミレーの絵に親しんでいたことは，生来この画家が好きなのかもしれない。ミレーの'Autumn leaves'図7 (1856)（ほのかに煙が見えるたき火を囲む4人の少女を描く）[9] を見るとき，絵の右側に思索にふけるようにくすぶる落葉の山を見ている小さな女の子がいる。ホプキンズの'Spring and Fall: to a young child' (1880) はそれなりにモデルがいるかもしれないが，どうしてもこのミレーの絵の中の女の子のためにホプキンズがこの詩を書いたように思われてならない。

ホプキンズのデッサンの中で他にラファエロ前派と関連ある並列的要素は，初期の日記の挿絵の幾つかである。それらはゴシック建築のスケッチである。ホプキンズは日記の中で訪れた教会の建物や天井を詳しく記述したり，時には挿絵を入れる。ゴシック建築の窓は美的空間の象徴であり，窓の内部にさまざまな図形や図柄を実現できる。ラファエロ前派が絵を描く空間として用いる円や円と四角形の組み合わせなど，ゴシックの窓の形態の変化したものと言えよう。挿絵24は中世風ともとれる若者の姿が描かれている。またラスキンの好んだ睡蓮を描いた挿絵20のすぐ下に簡単にラファエロ前派とその画家たちの名が記されている。[10] 図版10は，ラスキン流のち密な「アイリス」図8の素描で素晴しい出来である。ホプキンズのこのような物をち密に観察する力は日記によく表われている。それは物の個性や真実を探究しようとする克明な努力の記録で，その点ではラファエロ前派の画家の真しな努力や究明精神と通じると言える。

ただホプキンズはより詩の方にひかれたのであろう。*The Pre-Raphaelite* (1970) を書いたTimothy Hiltonによると，ラファエロ前派の画家が表現していないものは喜びであるという。[11] この点ホプキンズは自然の中で美しいものに出会ったとき，それは神の栄光にも通じるので，

喜びを詩に表現せずにはいられない。喜びを表すには詩は音楽と共にふさわしいものである。ホプキンズは音楽方面にも才能があり，より豊かな下地により，ラファエロ前派の画家たちと同じように新しい手法を求めて歩んだ人と言えよう。

Notes :

1) Julian Treuherz, *Pre-Raphaelite Paintings from the Manchester City Art Gallery* (London : Lund Humphries, 1980), p. 43. (以下 Treuherz と略す。)

2) *Ibid.*, p. 11.

3) *Ibid.*, p. 140.

4) *Ibid.*, p. 22.

5) モーリス・セリュラーズ，坂崎坦，岡田譲編集『ドラクロワ展図録』(朝日新聞社，1969)，H—16.

6) Treuherz, pp. 14, 39.

7) Treuherz, p. 16, pp. 53—63.

8) Kenneth Clark, *Civilisation* (London : British Broadcasting Corporation and John Murray, 1969), p. 286.

9) Treuherz, p. 15, pp. 49—50.

10) Humphry House (ed.) and Graham Storey (completed), *The Journals and Papers of Gerard Manley Hopkins* (London: Oxford University Press, 1959), p. 30.

11) Timothy Hilton, *The Pre-Raphaelites* (London : Thames and Hudson, 1970), p. 209.